

9月2日 親学講座のご報告

「海外の子育て事情から考える父性と母性」と題した杉本哲也先生の講座には、20名のご参加がございました。「子育て四訓」（乳児はしっかり肌を離すな / 幼児は肌を離せ 手を離すな / 少年は手を離せ 目を離すな / 青年は目を離せ 心を離すな）や「三つ子の魂百までも しっかり抱いて下に降ろして歩かせる」「可愛くば5つ教えて 3つ褒め2つ叱ってよき人とせよ」といった子育ての諺が母性、父性の役割の具体例として説明されました。

また、マザーテレサの「大切なのは何をしたかではありません。どれだけ心を込めたかです」「アフリカの国々が滅びるとしたら貧困が原因でしょうが、日本は心が原因で滅びるでしょう。豊かな日本に心の貧しい人がたくさんいます。それに気づくことさえできない人もいます。愛はまず家庭から始まります。まず家庭の中から不幸な人を救いなさい。夫婦が愛し合い、母親が家庭の中心となりなさい。自分の家庭が愛に満たされなければ隣人を愛することはできません」は今の日本人に胸を突き刺さることばでした。



以下は1歳半の息子さんを共働きの奥様と育てておられる30代のお父さんのご感想です。

本日、杉本哲也先生による「親学」の講座を受講しました。

「親学」とは親として必要なことは何かについて学ぶ 学問であります。

先生は、乳幼児から少年、青年期に至るまでの親の在りかたについて、丁寧に説かれました。中でも、乳児期は母性を発揮して、子育てに臨むべきであるのご指導頂いたことが印象深いですね。母性とは、愛着と優しさ、全面的受容であるということです。

それには、十分なスキンシップが望ましいそうです。

だっこなら任せておけと思ひ、質疑応答の時間において私が「父親もスキンシップを積極的にしても良いか」と尋ねました。しかし、「父親だとゴツすぎるため、赤ちゃんも不快に思っている、やはり母親中心にスキンシップをしてください」と先生からご指導頂き、少一しだけガッカリしました。

次回の親学講座は、12月25日（火）のあたりでございます。あらためてご案内させていただきます。

杉本 哲也先生のブログから最新のものをご紹介申し上げます。

大学院を卒業して、社会に出てから間もなく15年になる。その間、たくさんの人と出会ってきたが、長く関係が続く人と縁が切れてしまう人がいた。

中でも、しばらく付き合ったのに縁が切れてしまう人には大きな特徴があった。それは私心

を持って、私に近づいてくる人だということだ。たとえば一番多かったのは、私と付き合っていると松下政経塾の入塾に有利になると考えている人だ。私は選考過程に関わっているわけではないので、私と付き合っても有利になるわけではない。そういうことが分かると、縁が切れる。他にも人を紹介してほしい、仕事を紹介してほしい、有名人に近づきたいなど、自分の要望を満たす人間として私を見ている人とは縁が切れて行った。

逆に、長く関係が続く人は、私が目指しているものと同じ方向を見ている人である。たとえば道頓堀掃除であれば、観光客に気持ち良く観光してほしい、子ども炊き出しなら、子どもに居場所を作って幸せを感じてほしい、寺子屋だったら子どもに日本のいいところを知って誇りを持ってほしいなど、活動の目的（志）を共有できる人である。近江聖人と呼ばれた中江藤樹は『志だに切実に候へば、師友の縁奇遇これ有るも候ふ』と言ったそうであるが、結局のところ長く縁が結ばれるのは、志が同じ文字通り同志であることが条件なのだ。「すべての縁を大事にする」は聞こえはいいが、「同志を大事にする」人生のほうが使命を果たすことができるように思う。



映画『ビハインド・ザ・コーヴ』上映会

Behind "THE COVE"

～捕鯨問題の謎に迫る～

日時：平成30年11月4日（日）

13時半～15時半ごろ 開場 13時

会場：砥部町文化会館 3階 視聴覚室

上映協力金：1000円以上 学生 無料

第39回モントリオール世界映画祭ドキュメンタリー部門正式出品作品

「なぜ？」素朴な問いが全ての始まりだった。かつての大好きから生まれた小さな疑問は丹念な取材のもと、隠された驚きの真実をあぶりだす。渾身の反論ドキュメンタリー！

映画「ざ・コーヴ」が2010年にアカデミー賞長編ドキュメンタリー映画賞を受賞して以来、世界各国から日本の鯨食文化への風当たりは増すばかり。長年にわたる捕鯨問題に疑問を感じた八木監督は、映画の舞台になった和歌山県太地町に単身乗り込み長期滞在、高齢化した元捕鯨師たちの貴重なインタビューや太地でキャンプしている反捕鯨活動家、関係するキーパーソンを追って取材。その中でこれまでの一般には知らされてなかった問題の不可解な側面に気づく。

シー・シェパードよ、真実の力を知れ

映画『Behind "THE COVE" ができるまで』

八木景子監督の撮影手記 「正論」2015年12月号より抜粋

私にとって2015年9月上旬の1週間は生涯、忘れ得ぬ日になるだろう。日本の食文化を伝えるため、捕鯨論争のアウェーの地で一石を投じることができたと確信している。

私が初めて制作した映画「ビハインド・ザ・コーヴ」がカナダのモントリオール世

界映画祭のドキュメンタリー部門に正式に出品された。日本の捕鯨やイルカ漁の現場を舞台にした作品で、この期間にプレミアム上映が行われたのである。

映画祭の最中には、海外在住の邦人から、多くの激励もいただいた。その中には、この映画が海外で披露されたことに「思わず涙した」と記されたものもあった。こんなに熱い反応が寄せられたのも、鯨食文化だけが何故、一方的に非難されなくてはならないのかと多くの方々が心を痛めていた結果ではないだろうか。

私が本格的に捕鯨問題に関わったのは、たかだか1年半前に過ぎない。

「ザ・コーヴ」が日本の捕鯨に圧力をかける大きなきっかけとなり、昨年春には、国際司法裁判所（ICJ）で、日本の南極海調査捕鯨が「敗訴」したとメディアで盛んに論じられた。私はそのとき、大好きなクジラの竜田揚げはなくなるかもしれないと強い危機感を抱いた。

読者の方にとっては信じられないかもしれないが、私が和歌山県太地町は「ザ・コーヴ」の撮影地だと知ったのは撮影を始めてしばらく経ってからだ。しかも、イルカの追い込み漁が解禁される毎年9月から、シー・シェパードの活動家が集い、漁師たちに執拗な嫌がらせをしていることも知らなかった。SSは南極海にしか現れないとさえ思っていた。

私は"素人"向けのビデオカメラを片手に太地町に入った。そして、イルカ漁解禁日。町には予想以上の海外から来た活動家が集まっていた。私が記録のつもりで活動家の列を撮影していたら、突然一人の男性が私のもとへとやってきて、顔の近くまでカメラを押し付けられた。

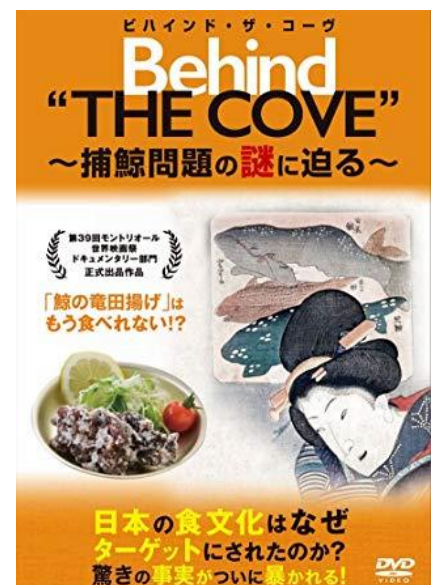
「ザ・コーヴ」では、漁師らが同じような嫌がらせを受ける場面がある。私はこのとき初めて、「太地町を元の穏やかな町に戻したい」と強く感じたのだった。

活動家たちは太地沖の海が見渡せる燈明崎に連日のように訪れた。この岬の神社で「ザ・コーヴ」の主演、リック・オバリーは境内の写真を撮り、自らの活動をPRした。私は社殿に参拝し「太地を元の穏やかな町に戻すよう頑張ります。鯨の食文化を死守したいのでお力を下さい」と祈った。

太地町には4ヵ月もの長丁場の滞在となった。貯金を切り崩してまで撮影に入る毎日。思えばこの1年間、映画制作だけに精魂使い果たす毎日だった。太地の現状を知れば知るほど、後に引くことができなくなった。

ときに縁もゆかりもない町で孤独に思うこともあった。ストレスがマックスになると、近くの温泉で身体を癒した。粘り強く続けることができたのは、活動家がわが物顔で跋扈する実情に「映像でやられたら映像で返す！」という強い気持ちがストレスよりも勝っていたからだと思う。

「ザ・コーヴ」が公開され、もう5年以上が経過しているのだが、日本国内では「あれは嘘だらけだ」「隠し撮りで卑怯だ」などという非難の声が今も聞かれる。私にし



てみれば、それなのになぜ、今日まで反証映画が出てこなかったのだろうかと思議でならなかった。きっと町に溶け込む敷居が高く、途中で多くの制作者たちが諦めてしまったのではないか。

さらに、制作のためには、たくさんの費用と時間がかかる。外国語の問題もある、活動家からターゲットにされる覚悟もいる。

150時間分の映像素材を編集する時間はのべ1500時間にも及び、編集中も不安に苛まされた。完成したところで、上映までたぐり寄せられるかどうかは何の保証もない。身を削り、貯金も切り崩したのに、何の結果ももたらさず、不毛に終わるかもしれない。

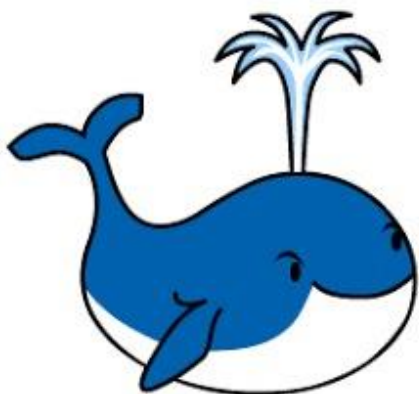
しかし、私には、歪められた情報の真実を伝えたい、という情熱があった。何かに突き動かされていた。寝食を削って編集作業に没頭した。

私が特に好きなシーンは2つ。日本人と鯨の繋がりを伝える歴史のシーンと南氷洋の捕鯨シーンだ。南氷洋のシーンでは太地でお世話になった元捕鯨師の顔がだぶってしまい、わかっているにも編集中に毎回、感極まった。この人たちが戦後、苦しく貧しい生活に追い込まれた日本人の命をつなげてくれたのだ、それが今、断たれようとしている、と夜中に涙流しながら編集していた。

日本では古来より鯨肉は縁起がある食材として継承されてきた。クジラは魚偏に京と書く。一番大きな魚という意味だ。先人たちは「子供たちが大きく育ちますように」「商売繁盛しますように」などと願いを込めて、祭りの際に鯨肉をふるまった。その伝統の鯨食文化がいま危機にあっているのだ。

私は映画制作のため資料を集め、日本人と鯨の深いつながりを把握した。そうして、「ザ・コーヴ」のような嘘でも自分たちの主張を通そうとする映画には、黙ってはいけないし、しっかりと日本から反論しなければならないという思いが強くなった。

しかし、ICJ 判決や「ザ・コーヴ」を完全に否定できないところがある。もし、この2つの問題がなければ捕鯨問題そのものの根源に気がつかずにいたのではないか。日本が誇る素晴らしい地域に巡り会うこともなく日本を支えた元捕鯨師の方々の話をみすみす聞きそびれてしまったのではないか。これまで日本の文化に対してぞんざいにしすぎていたことに、心底ぞっとする。



撮影中、私は何者かに取りつかれているのではないかと感じる事が頻繁にあった。そうでなければ、あの多くの偶然と困難な道ノりを猪突猛進した行動を理解できない。「天から誰かが降りて来て私の身体を使って撮影している」とさえ思った。

作品を日本国内のみならず、世界各地で上映できるようにこれからも努力していきたい。そのことが、制作に協力してくれた元捕鯨師や漁師、関係者のみなさんへの恩返しだと思っている。

作品を日本国内のみならず、世界各地で上映できるようにこれからも努力していきたい。そのことが、制作に協力してくれた元捕鯨師や漁師、関係者のみなさんへの恩返しだと思っている。

9月23日「氷雪の門」上映会のご報告

17名の方がご参加下さいました。以下、ご感想でございます。

- ◆私が学校で見た日本地図は樺太は赤色（日本の色）でした。本日の映画で戦争のむごさを思い切りみせていただきました。その中で、心の美しさ、使命感、友への思いやりの心等・・・戦争を知らない人達にもみてもらいたい気持ちです。戦争のないことを永遠に祈ります。ありがとうございました。（80代女性）
- ◆ソ連の残虐非道の国民性を改めて知る思いです。北方領土の回復を時間をかけてもやりぬいてもらいたい。（60代男性）
- ◆「怖い」の印象が一番強い作品でした。見終わった後、哀しみと苛立ちと怒りを感じました。無残でした。良くできた映画でした。（60代女性）
- ◆改めて戦争の残酷さを知りました。今後戦争がおこらないように世界平和が実現することを祈っています。（70代女性）
- ◆感動しました。生きてほしかった。とうとい犠牲の上に今の日本がある。残念ながら今の日本は良い国なのではないでしょうか。（60代女性）
- ◆日ソ不可侵条約を破ったソ連が憎い。こんな名画をソ連の圧力によって上映を中止するなんて考えられない。（70代男性）
- ◆やっと念願の『氷雪の門』を見ることができました。感動の連続でした。（60代男性）
- ◆世界は平和でなければならない。戦争は絶対だめだ。（60代男性）
- ◆昔、北海道で勤務していた時に見たのですが、改めて身につまされました。
- ◆ご案内いただきありがとうございます。日本国民として本来知るべきこと（真実）をこれからも提供して下さることを願っております。
- ◆戦争は二度としてはいけない。（60代女性）
- ◆有意義な時間でした。ありがとうございました。（60代女性）



拉致問題

特定失踪者問題調査会の荒木和博代表のメルマガの最新号を紹介させていただきます。

Subject: 二等国 【調査会 NEWS2835】 (30.10.7)

国際観艦式での自衛艦旗掲揚に難色を示した韓国政府に対して防衛省は護衛艦の派遣を見送る決定をしました。当然のことでしょう。馬鹿にされてまでお付き合いする必要はなく、行動があつてこそ相手にはこちらの意志が伝わります。まあ韓国海軍は国際的な常識は分かっているでしょうから辛い立場だとは思いますが。

報道によれば与党の院内報道官は書面ブリーフィングで「戦犯国として世界の平和を一瞬にして壊し、数えきれないほど殺傷行為を犯した日本が旭日旗を誇っているのは、日本が永遠に二等国家にとどまるしかない理由でないかと思う」と指摘したそうです。

それを言うなら朝鮮半島の平和を一瞬にして壊し、数えきれないほど殺傷行為を犯した北朝鮮の若大将に媚びへつらい一緒に白頭山に登った大統領を抱く韓国は北朝鮮が三等国家とすればそれより下の四等国家ということにならないのでしょうか。拉致問題もそうですが、北朝鮮の人権状況は何一つ変わっておらず、逆に言えば人権侵害を受けている人たちは棄てられた存在です。

この際日本はもっと韓国にその点を厳しく言うべきではないでしょうか。韓国の中でも声は出しにくくても日本の立場を理解している人は少なからずおり、そういう人たちのためにももっと韓国政府に対しては強くあたるべきだと思います。

まあしかし、日本も自分で自分を守る気がなく、拉致をされても取り返すのが他人頼みであれば二等国と言われても仕方ありませんが。

田下昌明先生 愛媛大学でご講演



日時：11月26日（月）10：20～11：50
テーマ：『現代社会の諸問題～母性の発生と発達』
会場：法文学部の共通講義棟 A45（4階）定員190名
法文学部 野田裕久教授の授業枠でのご講演でございます。

【田下先生のプロフィール】昭和12年北海道旭川市生まれ。北海道大学医学部卒。医学博士。小児科専門医。現在、医療法人歓生会豊岡中央病院長。北海道小児科医会理事。北海道病院協会監事。親学推進協会代表委員など。最近著は『この1冊で育児は完結する～もう子育てでは悩まない』（明成社）。

準備の都合上、出欠を拘束するものではありませんので、お申し込みをいただけますとありがたいです。ご連絡は、080-2988-7561（越智美香子さん）/090-8971-7721（青井）までお願い致します。

☆☆☆ 事務局 から ☆☆☆

★八木景子監督から11月4日（日）の上映会にメッセージをいただいております。「本作は、日本人の先人達の素晴らしさや、現代に続く国際社会の中の日本を再発見できる映画だと自信を持って言えます」。当日は監督のトークは残念ながらごさいませんが、普段お使いになる資料をいただいております。会場で紹介させていただきます。

★故大津寄章三先生の「改憲ソング」歌詞と改憲チャンネルのちらしを同封致しました。毎月2回、土曜日の午後1時から2時まで市駅前坊ちゃん広場で憲法改正署名活動を行っております。一度ご参加下さいませ。10月は20日と27日の土曜日でございます。

★エドワーズ博美先生から、『新潮45』に掲載されたご友人、平野秀樹氏の論文「『基地候補地』周辺が買収された宮古島の怪」をお送りいただきました。日本の領土が外国人に侵食されつつあることはご存じの通りでございますが、具体的な事例としてお読み頂ければ幸いです。

★日本政策研究センター発行の『明日への選択』誌10月号から「日本人に考えてほしいウクライナの悲劇」を同封致します。グレンコ・アンドリーさんは私達に訴えておられます。「多くのウクライナ人は、独立を失いかけてようやくその価値に気付きました。ですから、日本人は、国の独立を失いかける前に、大事にして下さい。」よろしければ『明日への選択』誌をご購読下さいませ。年間7000円、3ヵ月間の見本誌送付もでございます。

★平成29年度の会計報告が遅くなりました。前年度と比較しますと、会費収入は197,400円から155,100円に減少。一方、事業収入は21,339円から212,00円に増加。活動費支出が6,264円から193,323円に増加致しております。全体の黒字転換を果たしました。

★会費の切れる方には払込用紙を同封しております。引き続きご支援下さいますようお願い申し上げます。年会費は2000円でございます。封筒のアドレスシールの住所のあとの数字は今まで会費を納入していただいた〈年と月〉を表しています。長期会員の方は〈年〉のみ記載の場合もでございます。



健全な男女共同参画社会をめざす会

会長 青井美智子

〒791-0221 東温市上村甲218番地

電話 090-8971-7721 Fax 089-964-3903

<http://www.mezasukai.com/>

メール michikoaoi25@yahoo.co.jp